

Pass the block

平林由起子

制作主旨

都心に何か建てようとする、どうしても大きな『塊』となった建築物が出来上がってしまう。

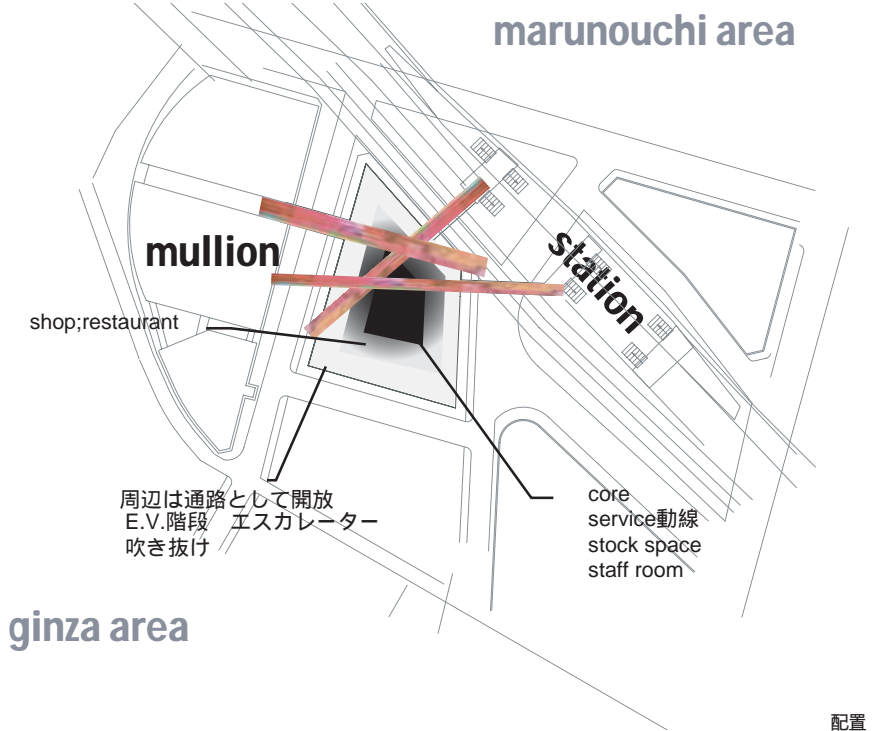
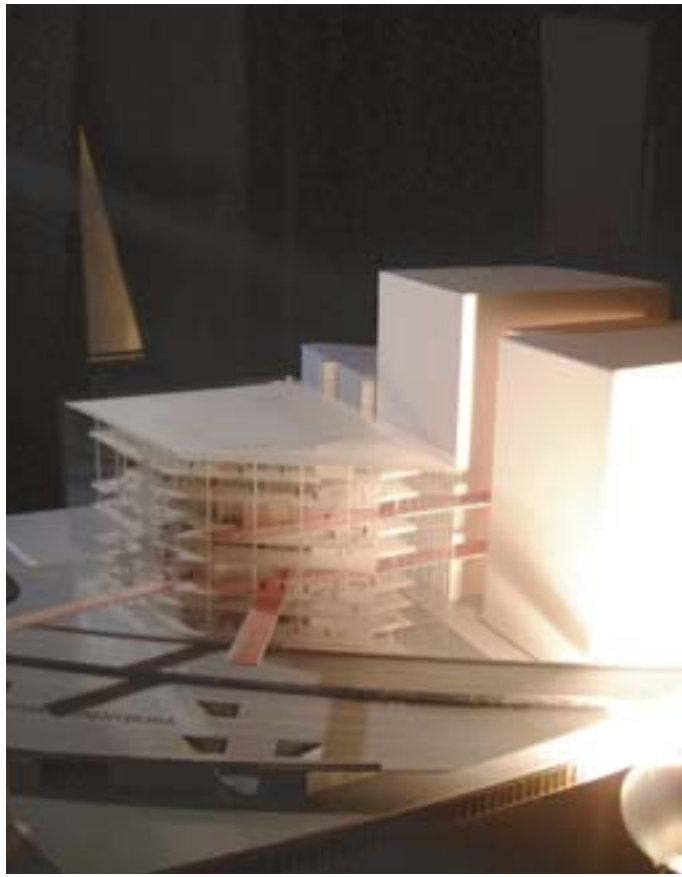
様々なファサードが現れ、その表現は透明で都市に溶け込もうとしているようだが、結局人の流れはそのファサードによって分断されている。都市の通りと建物はまったく別のものなのだ。

有楽町駅と有楽町マリオンとの間の一画は、両サイドに広がる丸の内・銀座と異なり、狭い通りに小規模商店街がひしめき合う雑踏的な雰囲気をかもし出している。『通り』の持つ雑踏的な良さを今でも残している印象的な空間だ。ここに今、再開発の動きが出ている。その際、ただの『塊』を出現させるのではなく、この場所の記憶を継承したものを提案したい。丸の内と銀座の中間に位置したこの場所に求められる『通過空間』の要素。そこで、従来の商業施設のプログラムの反転を試みた。中心動線だったものを逆転させ、人の流れがそのままファサードへとつながる。都市からの軸線を建物に貫通させることで、都市からの流れをそのまま引き込む。店舗と道との間のあいまいな領域を通過空間とすることで、雑踏的な良さを継承し、建物と都市との緩衝帯となしてほしい。

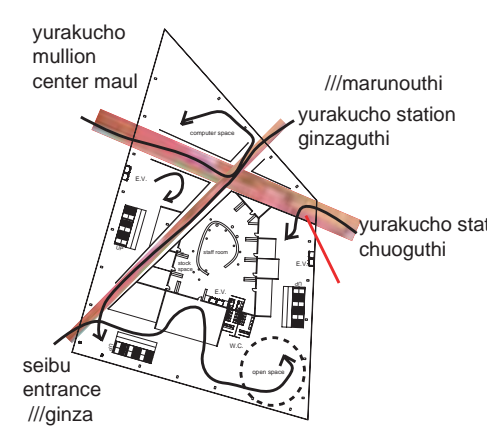
講師評：高宮眞介

丸の内オフィス街が高級ブランドショップ街に華やかに変身しつつあるが、有楽町駅を挟んだ反対側に、戦後の闇市風の店が並んだ一画がある。おそらくここも早晚再開発がかけられ、事務所や店舗からなる大型の建物に取って代わられるであろう。いずれにしても、今ある路地風の道路と一体になった商空間は消えてしまう運命にある。この作品は、なんとか今ある路地風の魅力を建物に持ち込みながら、ステレオタイプ化された大型店舗にない魅力を作り出せないかと苦闘したものである。

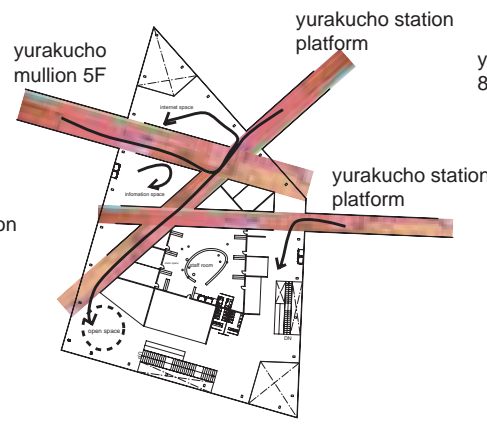
結果としては、道路と一体となった商空間を立体化するという提案になった。つまり周辺の建物や有楽町駅につながる三つのレベルに、建物を貫通する道路を設け、それに沿って店舗を貼り付けることにした。また、それ以外の基準階では、通路を建物の外周部に設定し、通路と店舗の賑わいを都市に対して開いていくような建築にしている。これらは、在来の大型店舗によく見られるような中央の大吹き抜け空間に店舗が張り付く、いわゆる内向きの空間構成にない魅力を都市に開陳し、看板建築に成り下がってしまった商業建築の表皮を、もう一度内部のアクティビティを表出する魅力あるものにしてしようとした点で評価される。



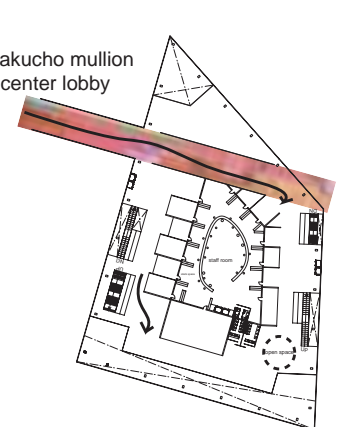
配置



地下1階平面



4階平面



6階平面